



これは これは これは

今年の熱さかな

子規

正岡子規は「これは これは これは」と3回も繰り返して熱さを表現しています。草木は乾き、夜空の星さえ涼しさを感じさせることなく、寝苦しいまま夜が明ける日もあり、日照りを冷ます夕立が欲しくなります。

夏の季語に「風死す」があります。

かすかに感じていた風がびたつと止んでしまい、たちまち暑さで息苦しさを覚えるような状態を表す言葉です。

さて、30数年前、家族で内モンゴルを旅したことがあります。

大草原を渡る風、空に浮かぶ雲、果てしない大地。8月でしたが、夜はゲルの中でも暖房が必要なほどの寒さ、空を見上げると満天のきらめく星に感動したことを昨日のことのように覚えています。

夏はさそり座、冬はオリオン座。季節の星座を必死に覚えてた子どもの頃を懐かしく思い出しています。暑い日は緑側で涼みながら、寒い日は閉

めきつた雨戸を少し開けて、夜空の星座を確かめたりもしたものです。

「夏のあらゆる星座が、われわれにいどみかかろうようにして出ている」「うかつに物を言えば、星にとどいて声が星からはね返ってきそうなほどに天が近かった」「街道をゆくモンゴル紀行」司馬遼太郎さんはモンゴルで、満天の星に押しひしがれるような体験をしたことを語っています。

暦の上では間もなく立秋です。「くすぐりの木」の別名もある庭のサルスベリが炎暑の中、赤い小花を揺らしています。

「炎天の地上花あり 百日紅」
さすべり
(高浜虚子)

樹皮が剥がれやすく、幹はつるつるだから木登り上手のサルだつて滑るだろう、とその面白い和名があります。

「百日紅」と書くのは100日にも及ぶ花期の長さにちなんだものです。夏盛りの頃のサルスベリの赤い花には一服

の清涼感が漂ってきます。

「大暑」「極暑」「炎暑」と暑さを表すいろんな季語の中でも極め付けは「溽暑」でしょう。じつとしていてもべつたりと絡みつくような苦痛と不快感を伴う暑さを言います。家にクーラーなどなかった頃は、どうしていただろうと、つい不遜なことを思うこの頃です。

外では、今を時とばかりにセミが鳴いています。

炎暑続きの毎日「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」「奥の細道」と詠んだ芭蕉の心境にはとてもなれそうにありません。

日差しは時にまだ厳しいですが、風はすでに夏の終わりを告げています。

夏と伴走した百日紅だけがまだ赤い色を残しています。まもなく秋。



指宿市長 豊留悦男